

「主は深く憐れんで」－マタイによる福音書講解説教 83－

詩篇

第51章 1節～4節

マタイによる福音書

第20章 29節～34節

説教

岡村 恒 牧師

「イエスは深くあわれんで、彼らの目にさわられた。すると彼らは、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。」(34節)二人の人が、暗闇から光へと移され、躍り上がって主イエスに従って生きる者へと変えられました。

エリコからエルサレムに向かう途中に、二人の目の見えない人が、巡礼者の憐れみにすがっていました。彼らが抱いていた希望は、わずかな施しを期待するささやかなものでした。二人が座り込んでいたのも、人生の本道ではなくて道ばたでした。私たちの人生全体も同じ姿をしています。道ばたに座り込んで上着をかぶり、その場所にしばりつけられ、ほんの小さな満足や幸せを望むことしか出来ないでいます。

主イエスは、この日エルサレムに向かうために群衆と共にエリコを出発されました。主イエスの目的は一つ。エルサレムに上ることです。そこで私たちの救いのために捕らえられ、あざけられ、十字架につけられるためです。この主イエスに向かって「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と彼らは叫び続けました。ダビデ王の末裔に、本当の救い主が現れて、私たちをこの悲惨な現実から解放してくれる。この約束を信じて、多くの人々もまた救い主を待ち望んでいました。

「私をあわれんで下さい。」世界中の人間が、神に向かって発することが出来る言葉はこれだけです。神に向かって声を上げること自体が、私たち罪人には赦されるはずのないことだからです。しかしこの日、二人の盲人は、神のひとり子主イエス・キリストが彼らに近づき、招き、口を開いて下さったので叫ぶことができました。そして、この叫びを聞いて主イエスは立ち止まり、彼らと呼ばれました。二人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がって主イエスのもとに行きました。上着はこれまで彼らを縛りつけ、立ち上がることを妨げてきました。彼らも上着に守られていると思っていたかも知れませんが、私たちにも上着があります。どうしてもそれを手放すことが出来ない上着。私たち自身を守っているようでありながら、実は私たちを縛り続けているもの。聖書の別の言葉では、罪の支配、死の支配、死が与える絶望の支配と呼ばれる上着です。

主イエスに招かれ、み元に近づくように導かれた者は、そこで死と滅びの上着から解放され、まことの救い主の前に踊り出ます。そこで、主

イエスの問いかけの言葉を聞きます。「わたしに何をしてほしいのか」。私たちもまたこの問いかけを聞く必要があります。自分ではいったい何が必要で、誰に、何を求めて良いか分からないからです。主イエスの、「わたしに何をしてほしいのか」という問いかけには、あなたに本当に必要なものを与えようという主イエスの確かな招きの言葉が満ちあふれています。

彼らは答えました。「主よ、目をあけていただくことです」。これまでこんなことを誰かに求めたことはなかったでしょう。道ばたに座り、他人の憐れみにすがりつくようにしてその日の糧を得ていました。立ち上がることや、天を見上げることを望んだことさえなかったかも知れませんが、しかしこの日、主イエスに問いかけられて、彼らは魂の叫びを声にしたのです。

「主よ、目をあけていただくことです。」これまで見たことのない世界を目にして生きる。神に捨てられた者として、絶望の暗闇の中で小さくうずくまっていたところから解放されたいという願いを口にしました。暗闇から解放されて光の中を歩く。神を見上げて生きる者となる。これこそ、私たちが本当に必要としているものです。罪と死の絶望から解放されて、新しい本当の光の中を歩む幸いを必要としている私たちをご覧になり、主イエスは「深くあわれんで」手を伸ばし、さわってくださるのです。

この日の出来事、この二人の救いの出来事は、私たちに神が与えて下さる希望と信仰、救いの確かさを証しています。私たちも、この二人と同じ仕方で救われるのです。ただ主に招かれ、問いかけられ、自分自身の罪の姿に絶望し、ただひたすら「あわれんでください」と叫ぶ時、主は「深くあわれんで」手を伸ばして、私たちを、深い絶望の暗闇から引き出して下さいます。今日、この場所でも同じことが起こります。一人の姉妹が、罪の赦しの洗礼を授けられて、暗闇から光の中へと移されます。今日から、神の栄光を目にしながら生きる者となるのです。

信仰を与えられ、救われた者に主が言われたことはいつでも一つです。この救いを宣べ伝えたらよい。行って、あなたが救われたその事実を語り伝えたらよい。道端から立ち上がった者として、主イエスに従ってまっすぐに歩んだらよいと。

(記 岡村 恒)